盲腸固定術の遠隔成績について

大森赤十字病院

仲 原 寛

Hiroshi Nakahara

牧 克 己

Katumi Maki

I ま え が き

私共は大森赤十字病院にて昭和 28 年 8 月より昭和 31 年 12 月までに移動性盲腸に対し施行した盲腸固定術の遠隔成績について調査したので、そのあらましを述べる。調査方法は往復ハガキによるアンケートで全症例 20 例中 16 例の回答が得られた。

II 主訴と症状 (術前)

右下、側腹部の鈍痛、圧痛及び不快感と便通の不定 (秘結) がほとんど全症例を占めている。主訴を訴えてより来院までの期間は 1 月～4 年でその間種々の内科的治療も無効のものが多かった。

性別では女性が 15 例、男性 5 例である。

年齢別では 19 才以下 1 例、20～29 才 12 例、30～39 才 5 例、40 才以上が 2 例であった。

自覚的症状は持続的或は間歇的の右下、側腹部の疼痛、便通の秘結 (2～3 日に 1 行) 並びに食思不振が多かった。又排便により症状の軽快するものがかかり含まれていた。

他覚的症状は右下側腹部の圧痛—Mac. Burney 氏点より上行結腸中央部に及ぶ圧痛を認めるものが多く、時に尿塊による腸詰様腫瘤を触知した。

III 診断と手術

まず一般検査により泌尿器、子宮附属器及び消化器の炎症、結石、腫瘍並びに寄生虫症を除外した後、造影剤使用による X 線透視で回盲部及び上行結腸の異常可動性を確めた。

手術方法は主として副直腹筋切開にて腹腔に達し、虫垂切除ののち Wilms 氏法及びその変法—広く上行結腸全長に亘り肝彎曲附近まで固定—により後腹膜に固定した。

切除虫垂はほとんど肉眼的、組織学的に異常を認めないものが多かったが、糞石、萎縮、虫垂間膜の癒着による屈曲が数例に見られた。又肝彎曲の下垂と Jackson 氏膜の形成が数例に認められた事が注目され

た。

IV 遠 隔 成 績

1. 自覚症状の消失したもの 4 例、軽快したもの 9 例、不変のもの 3 例、増悪なし。

2. 便通は正常 (1 日 1 行) になったもの 10 例、尚秘結するもの 5 例、下痢を訴えたものが 1 例あった。

3. 食思は良好となったもの 9 例、普通 6 例、不良 1 例であった。

4. 体重は術前より増加 (平均 2.5 kg) 9 例、不変 3 例、減少 2 例、不明 2 例であった。

5. 腰痛は術前 2 例であったが術後 1 例増加した。

6. 月経は順調なるもの 8 例、不順なるもの 4 例であった。

術後罹患した病気は痔核及び中耳炎が各 1 例あった。

V 考 察

盲腸の可動性については正常と異常の境界を明確に定めることは極めて困難である。検査の主観によつても或る程度左右されるし、又成書にもその明確な記載を見ない。X 線透視により異常可動性が有ると思われるものでも何等愁訴の無いものが多い。

そこで私共は愁訴のある者のうち、回盲部の可動性について大凡の基準を考えた。即ち左右の圧排により盲腸が正中線を越え、立位にて上下に 6 横指以上移動するものを移動性盲腸と診定した。

一般に移動性盲腸は 20～30 才台の女性、殊に無力性体質で神経質のものに多いといわれているが、私共の症例も大体一致していた。術前の診断と開腹時所見は全例を通じ略正確であった。移動性盲腸は内臓下垂症の部分症状であり無力性体質に伴う一種の精神々経症状であるから、その固定をはかっても症状の軽快を見ぬ場合が少くないという者もいる。しかし私共の成績を検討するに症状の改善されたものが大多数を占

め、固定術の効果は比較的良好であると考え。食思の良否、体重の増減、腰痛の有無及び月経の順、不順は種々の因子に左右されるものであるから、今後更に調査の方法を研究したい。

VI 結 語

私共は過去 4 年間当院にて施行した盲腸固定術の遠隔成績を調査し次の結論を得た。

術前の患者の主訴は術後大部分消失または減退し再発をみない点から、術前の検査を充分にして手術の適応を誤らなければ、盲腸固定術は有効であると考えられる。

終りに御指導を賜った下妻院長に深謝致します。

文 献

日本臨牀：13 (2), 95 (1955)